有田の四季を詠む

『有田の四季を詠む』作品集によせて

北は、修験の山としても知られる黒髪連山、西は佐世保市との境を成す国見山と、面積の7割を森林が占め、季節の移ろいが色鮮やかに現れる有田町。また日本磁器発祥の地としてその伝統と技術を今に伝えてきた町でもあります。

「有田の四季を詠む」は、この有田について、春・夏・秋・冬の各季節に一句・一首の歌を詠んでいただき、その歌を通して、まだ有田をご存じない方に有田を想像し、興味を持っていただくきっかけにしたいということで始めた事業です。

平成24年の秋の部から始め、これまで2，221点の歌が集まりました。参加してくださった方も572名にのぼります。

この歌集は、初年度から8年間の最優秀作品と、各季節の優秀賞・入選の作品を集めたものです。

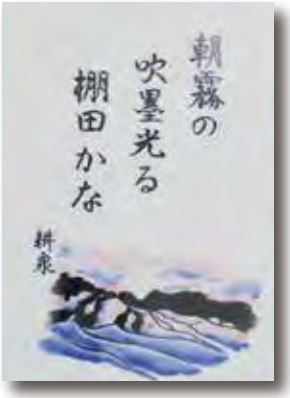
有田の美しい風景、人々の暮らし、祭りの風景、有田焼の歴史など様々な歌が生き生きと詠まれています。

是非最後までご覧いただき、有田の豊かな情景を思い描いていただければと思います。

令和3年3月　　有田観光協会

平成二十四年度

選　俳句／松尾鉄仙
短歌／廣澤益次郎
川柳／松尾鉄仙・廣澤益次郎



最優秀賞

朝霧の　吹墨光る　棚田かな

有田町　耕泉

■俳句

秋・冬の部

優秀賞

裏山は　窯の煙や　冬の鵙　　大阪府　一橋亜希子

入選

相撲場に　呼び出し響き　大公孫樹　　長崎県　源　太

裸婦像に　山湖に小春の　日のゆたか　　有田町　雪竹　澄子

紅葉しぐれ　マイセンの鐘　音湿り　　伊万里市　山口　露子

山茶花や　生垣低き　小窯元　　有田町　竹重よし子

■短歌

秋・冬の部

優秀賞

胸のうち 秘色の湖面に 呟けば
小波そっと包みくれたり　有田町　松尾ミツエ

入選

凜として 立つ陶雛に 魅せられて
春の弥生の 有田を巡る　佐賀市　中村　孝

■川柳

秋・冬の部

入選

上有田「みどり」恋しい十二月　神奈川県　巨江の孫

きんいろのいちょうがくれたきれいなクレヨン　福岡県　たすく

平成二十五年度

選　俳句／松尾鉄仙
短歌／廣澤益次郎
川柳／松尾鉄仙・廣澤益次郎

■俳句

年間最優秀賞（夏の部　優秀賞）

屏風岩　蹴って背泳ぎ　青き空

有田町　雪竹　澄子

春の部

優秀賞

囀りに膨らむ神の大銀杏　有田町　竹重よし子

入選

列車風　陶山神社の　さくら舞う　長崎県　源　太

初旅や　青磁の翡翠（ひすい）ペンダント　伊万里市　山口　露子

秋の部

優秀賞

露けしや　石場に残る　洞二つ　福岡県　柴田佳津子

入選

星霜を　晒す磁石場　昼の虫　福岡県　川村　初子

トンバイ塀　個性愉しむ　ホ句の秋　福岡県　吉田　文代

秋声を繋ぐトンバイ塀の径　福岡県　宮脇　睦子

風透る宮の裏まで秋深し　福岡県　阿比留初見

夜明け空銀杏雲から金の雪　福岡県　まもる

冬の部

入選

雪舞ひて冠火食（かんむりひくい）の　なお白し　大分県　西川加依子

町挙げて弾む小春の茶碗市　有田町　竹重よし子

年間最優秀賞（春の部　優秀賞）

将軍家 献上の大皿「欲しかね」と
姑はサラリと笑みて言いおり

武雄市　野中恵美子

平成二十六年度

選　俳句／松尾鉄仙・土井下三千司
短歌／廣澤益次郎
川柳／松尾鉄仙・廣澤益次郎

■俳句

春の部

入選

新緑の色に染まりて唐船の
城址を巡る石楠花の頃　有田町　上妻　幸英

夏の部

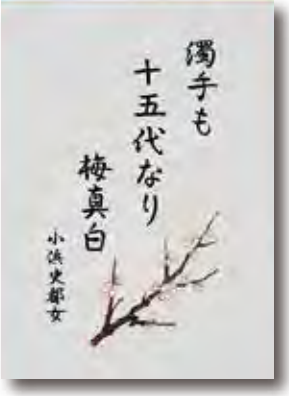
優秀賞

古木場のダムが湖底に秘む思い
知ることあらめ青年釣り人　有田町　諸石　晧子

冬の部

入選

望郷を陶土（つち）に捧げし三平翁の
遺徳つがれて四〇〇年に　有田町　松尾ミツエ



年間最優秀賞（冬の部　優秀賞）

濁手も十五代なり梅真白

唐津市　小浜史都女

春の部

入選

いぬふぐり 道をすっかり 青く染め　有田町　中山千峰子

老鶯を ききオカリナを きく有田　福岡県　西村　榮子

夏の部

優秀賞

青もみじ 日差しをあびて 透き通る　有田工業高校　中山千峰子

入選

陶工の 碑に残鶯の 声しきり　唐津市　中島　裕子

六道を 見守る地蔵や 梅雨晴るる　唐津市　須磨子

窯里は 山紫水明 河鹿鳴く　有田町　竹重よし子

青もみじ やさしい風で さらさらと　有田工業高校　力武　由奈

柿若葉 トンバイ塀に 椅子ひとつ　武雄市　吉富　綾子

花は葉に ダムのほとりの 年尾句碑　佐賀市　辻　洋子

秋の部

入選

黄を尽くし 釉裏金彩 大公孫樹　有田町　耕泉

冬の部

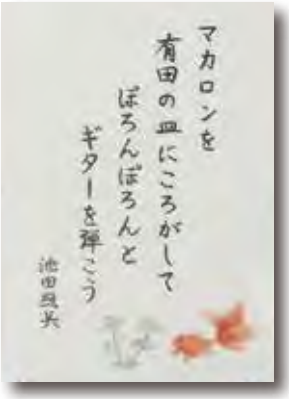
入選

大年や 陶磁の里も 煙なし　東京都　福士　大智

悴む手 陶器の神に 合わせたり　有田工業高校　田川穂野香

大公孫樹 冬木となりて 天を衝く　唐津市　須磨子

陶器売る 白壁に射す 冬陽かな　唐津市　中島　裕子



年間最優秀賞（夏の部　入選）

マカロンを有田の皿に　ころがして
ぽろんぽろんと　ギターを弾こう

小城市　池田　照美

春の部

入選

なき母とともにめぐりし　なつかしの
有田の市のトンバイの塀　　多久市　田中丸亮子

あたらしい　スニーカー履き　今年こそ
君をつれだす　春陶器市　　佐賀市　中野亜貴子

秋の部

入選

その白き　両の手に持つ　染めつけの
皿に降る降る　有田の銀杏　　小城市　池田　照美

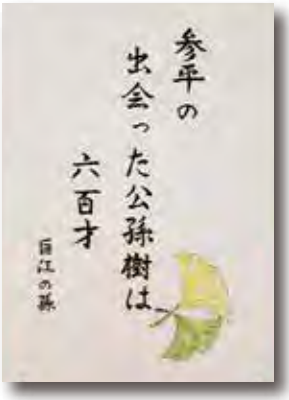
冬の部

入選

待ってたよ有田の町をメルヘンの
世界へいざなう　サンタクロースを

有田町　松尾ミツエ

■川柳



年間最優秀賞（秋の部　入選）

参平の　出会った公孫樹は　六百才

神奈川県　巨江の孫

春の部

入選

有田やきたべておいしいおさらかな　熊本県　まつおたいき

冬の部

入選

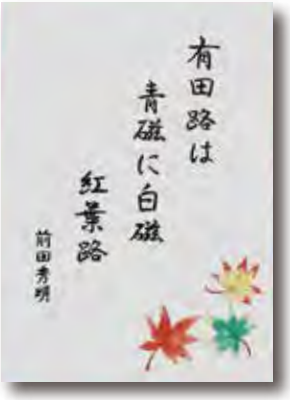
クリスマス　煙突のぼる　サンタ達　伊万里市　川道　好隆

有田町　上から見守る　李参平　有田工業高校　南里　千紘

平成二十七年度

選 俳句／土井下三千司
短歌／廣澤益次郎
川柳／土井下三千司・廣澤益次郎

■俳句



年間最優秀賞（秋の部　優秀賞）

有田路は 青磁に白磁 紅葉路

長崎県　前田　秀明

春の部

入選

春の雨 溜めて弾いて 皿茶碗　福岡県　阿比留初見

老鶯や トンバイ塀の 六地蔵　唐津市　吉原絵美子

水神は 町屋の隣 春の雨　唐津市　谷山　瑞枝

夏の部

優秀賞

ラベンダーの 匂ひの中を 歩きけり　唐津市　篠原　涼子

入選

陶市に 値切上手な サングラス　有田町　舘林　典子

新緑の 町をつらぬく 陶器市　福岡県　阿比留初見

大公孫樹 手当の跡や 若葉風　唐津市　吉原絵美子

陶棚に 万の素焼や 新樹光　唐津市　小浜史都女

トンバイ塀 続く窯径 ほととぎす　唐津市　篠原　涼子

■短歌

絵描き座に 大筆小筆 走り梅雨　唐津市　篠原　涼子

さつき晴 駐車場満杯 陶器市　有田町　雪竹　澄子

新緑や 娘は子連れ 陶の市　有田町　雪竹　勝太

岩肌に つたふ名水 河鹿鳴く　有田町　耕泉

陶器見て 憩へる茶屋の 粽かな　伊万里市　田中　秋子

秋の部

入選

新涼の 器に吹いて 赤絵皿　長崎県　源　太

大公孫樹 歳重ねたる 神の留守　唐津市　吉原絵美子

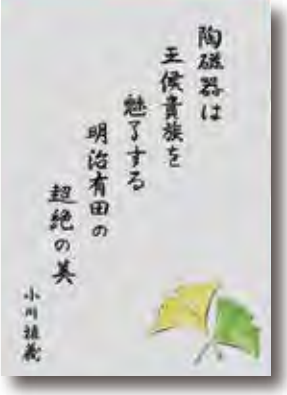
銀杏散る 窯場にいまも 番所跡　多久市　大石ひろ女

冬の部

入選

ぽいしんに 余土のた走り 初轆轤　有田町　岩尾　弘

寒灯や 白磁に浮かぶ 四〇〇年　有田町　耕泉



年間最優秀賞（秋の部　入選）

陶磁器は 王侯貴族を 魅了する
明治有田の 超絶の美

鹿島市　小川　雅義

春の部

入選

陶器市　売手買い手の掛け合いが
成立したか 歓声あがる　有田町　松尾ミツエ

川の面に映る梅花の朧にて
絵付けの筆も 緩やかならん　長崎県　寺井　順一

夏の部

入選

金山で 栄えし名残の無縁墓
あまた苔むし 子孫はいずこに　有田町　松尾ミツエ

秋の部

入選

何処より 帰って来たのか ふる里の
茶碗供養で 静かに眠る　有田町　松尾ミツエ

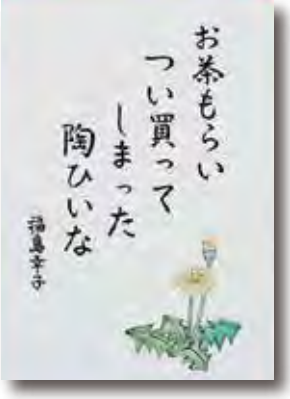
冬の部

入選

碗灯に 浮かぶ磁石場 幽玄の
世界へ誘い 祭り始まる　有田町　松尾ミツエ

新婚の 子らと酌みたし 屠蘇酒の
盃を探して 有田を歩く　小城市　池田　照美

■川柳



年間最優秀賞（春の部　入選）

お茶もらい つい買ってしまった 陶ひいな

佐賀市　福島　幸子

平成二十八年度

選 俳句／土井下三千司
短歌／廣澤益次郎
川柳／土井下三千司・廣澤益次郎

■俳句

春の部

入選

大絵皿 龍の目にらむ 有田焼　伊万里市　川道　好隆

アイス食べ ラムネ飲む子の 陶器市　有田町　雪竹　勝太

かくれんぼ トンバイ塀の まがりかど　佐賀市　福島　幸子

夏の部

入選

尻冷やす 機能が嬉しい 磁器の椅子　東京都　本橋　惟子

連理木 楠とエノキが 一体に　伊万里市　川道　好隆

年間最優秀賞（秋の部　入選）

里祭 老いも若きも 皿おどり

伊万里市　田中　秋子

春の部

入選

金襴の 衣裳重しや 陶の雛　唐津市　原口　勢子

古民家の 雛の御膳や 陶の町　唐津市　須磨子

土筆摘む 陶片残す 窯の跡　有田町　耕　泉

春光や ろくろ踏む娘に 笑みも出て　福岡県　渋田千々穂

夏の部

入選

山門も 店頭と化し 陶器市　有田町　雪竹　勝太

陶製の 青きボタンや つゆ晴れ間　長崎県　辻尾　修

石積みの 唐臼のあと 河鹿笛　唐津市　篠原　涼子

遠ざかる 白亜の駅舎 夏帽子　有田町　耕　泉

秋の部

入選

窯裏の 楠が好きなり 秋の蝉　唐津市　小浜史都女

見あげれば 肩に降り来る 大公孫樹　唐津市　篠原　涼子

イベントは 四百年目を かざる秋　鹿島市　小川　雅義

轆轤場の 土ひんやりと 冬隣　伊万里市　田中　秋子

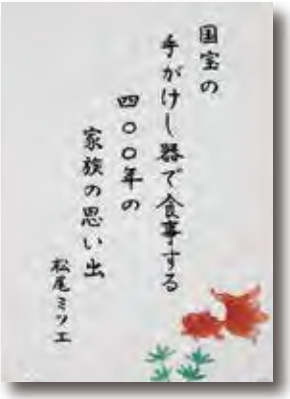
冬の部

入選

冬ともし ゆらぐ白磁の 透かし彫　伊万里市　田中　秋子

川底の 陶光らせて いる冬日　有田町　雪竹　澄子

戸矢蕪の 紅紫染めたる 白磁皿　有田町　耕　泉



年間最優秀賞（夏の部　入選）

国宝の 手がけし器で 食事する
四〇〇年の 家族の思い出

有田町　松尾ミツエ

春の部

優秀賞

有田路は 歴史息づく 町並みに
四百年目の 初夏は来にけり　鹿島市　小川　雅義

入選

外国人 ロクロ体験 首ひねる
笑いながらも 悪戦苦闘　鹿島市　小川　雅義

運動会 皿板かつぎに 皿かぶり
風よ吹くなと 固唾を飲みぬ　有田町　松尾ミツエ

夏の部

入選

有田町には 古往今来 和歌の杜
あたご神社の 三十六歌仙　鹿島市　小川　雅義

■川柳

秋の部

入選

大火にて 街あらかたの 失せし折
　盾となりたる いちようの大樹　有田町　諸石　晧子

どこにある 阿吽が逆の 狛犬は
　ジュニアガイドの クイズで探す　福岡県　長尾　順子

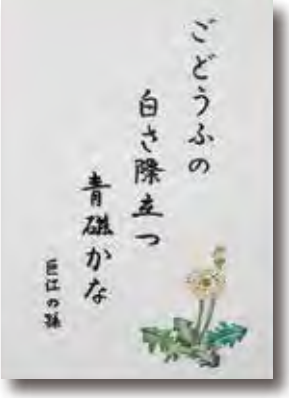
冬の部

入選

磁器太鼓 音色を聞きつつ 暖を取る
　大晦日の 雪の汁一膳　鹿島市　小川　雅義

末裔と 共に唱うる 御詠歌よ
　参平翁の 御霊へ届けと　有田町　松尾ミツエ

有田焼の 豪華大鉢 シリアでは
　嫁入道具 平和を願う　福岡県　長尾　順子



年間最優秀賞（春の部　入選）

ごどうふの 白さ際立つ 青磁かな

神奈川県　巨江の孫

春の部

入選

皿茶碗 お喋りしそうな まち有田　鹿島市　小川　雅義

陶人形 上手に芝居する 有田館　伊万里市　川道　好隆

夏の部

入選

夢かつぐメゾン・エ・オブジェ・ニュー有田　鹿島市　小川　雅義

秋の部

入選

世界遺産 登録願う 有田町　鹿島市　小川　雅義

器より 銘に目がいく 有田焼　長崎県　前田　秀明

窯巡り 陶彩弁当 腹満たす　鹿島市　小川　雅義

ここからか 茶碗便器も 泉山　福岡県　長尾　順子

冬の部

入選

碗琴の キン・コン・カンが 心地よい　鹿島市　小川　雅義

又来たい 陶磁器まつり 有田町　福岡県　長尾　順子

平成二十九年度

選 俳句／土井下三千司・久保田利江
短歌／廣澤益次郎
川柳／土井下三千司・久保田利江・廣澤益次郎

■俳句

年間最優秀賞（春の部　入選）

春燈や　明治有田の　異人館

有田町　田中　耕泉

春の部

入選

芹取りは　いつもこの谷　棚田水　有田町　雪竹　澄子

蕗長けて　唐臼跡に　水の音　唐津市　小浜史都女

夏の部

入選

草笛を　陶工の祖に　きかせけり　唐津市　小浜史都女

祝詞終へ　陶祖の宮の　風薫る　福岡県　柴田佳津子

脈々と　錆滴るや　白磁鉱　有田町　耕泉

天目の　底光りせる　梅雨晴間　伊万里市　田中　秋子

秋の部

入選

さっくりと 陶助おこし 夏の果　伊万里市　田中　秋子

楠落葉 トンバイ塀に 囲まるる　神埼市　上瀬　悦子

草は実に 唐臼跡の 水の音　唐津市　小浜史都女

晩秋や 有田を巡る 七ツ星　有田町　雪竹　勝太

秋空を 背負って来たる 人力車　鹿島市　小川　雅義

秋天や 薪放りつぐ 登り窯　伊万里市　田中　秋子

冬の部

入選

花ひいらぎ 窯裏小さき 水の音　唐津市　小浜史都女

磁石場の 空を真青に 冬紅葉　多久市　大石ひろ女

高麗の 神に音たて 木の実降る　唐津市　田久保峰香

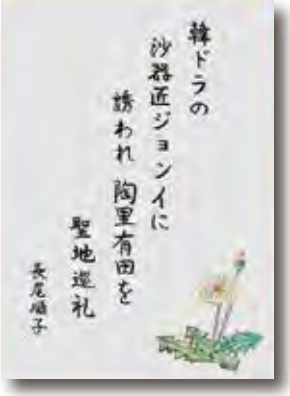
陶板の 標なぞりて いる冬日　有田町　雪竹　澄子

初窯出 期待をこゆる 夢の色　伊万里市　田中　秋子

年間最優秀賞（春の部　入選作品）

韓ドラの 沙器匠ジョンイに 誘われ
陶里有田を　聖地巡礼

福岡県　長尾　順子



春の部

入選

陶器市 まぢかに迫り 金槌や
　皿のひびきで 活気みなぎる　有田町　松尾ミツエ

桂雲寺 阿吽の像は 山門を
　行き交う信徒の 心受け止む　有田町　諸石　晧子

陶市の 常連ならん 近道を
　いとも自在に 抜けゆく客ら　有田町　諸石　晧子

夏の部

入選

川底に 眠るベンジャラ 掘り起こす
　探し集めて 時代と向き合う　鹿島市　小川　雅義

時により ミニ同窓会の 集いとも
　有田温泉は 健康サロン　有田町　諸石　晧子

金山で 栄えし頃の 遊郭街
　いま円山は グラウンドとなる　有田町　松尾ミツエ

秋の部

入選

アート展 岳の棚田に ひるがえる
　白いTシャツ 陽に映えており　有田町　松尾ミツエ

八重桜で 入学歓迎 遠足を
　永年迎ゆ 曲川神社　有田町　諸石　晧子

神官は 十九代とよ 山伏を
　祖と仰ぎ古る 山田神社は　有田町　諸石　晧子

心地よき 八〇〇年の 眠りなや
　累々と積む 石垣の貌　有田町　諸石　晧子

陶の里と 言わるる有田の 夢叶い
　日本遺産の 登録に沸く　鹿島市　小川　雅義

冬の部

入選

雪の中 お転婆娘が 着物着て
　雛を抱いて 街並み散策　鹿島市　小川　雅義

蛇行する 有田川そを 天然の
　外堀となし 唐船城聳ゆ　有田町　諸石　晧子

年間最優秀賞（春の部　入選）

皿かぶり 競走なれど そろそろり

鹿島市　小川　雅義

春の部

入選

紐解き有田焼五膳 いただきます　福岡県　長尾　順子

赤い糸見たさにすがるさんのんさん　神奈川県　巨江の孫

秋の部

入選

ガイドするボクらの有田ジュニア隊　福岡県　長尾　順子

駅で食う有田焼カレー いと旨し　鹿島市　小川　雅義

磁石場に 残るノミ跡 四百年　鹿島市　小川　雅義

銘を見て 器を選ぶ 外人さん　鹿島市　小川　雅義

冬の部

入選

碗灯が　陶祖の社を　照し出す　鹿島市　小川　雅義

平成三十年度

選 俳句／田中 南嶽
短歌・川柳／廣澤益次郎

■俳句

春の部

入選

ものの芽や 陶祖ゆかりの 登窯　有田町　田中　耕泉

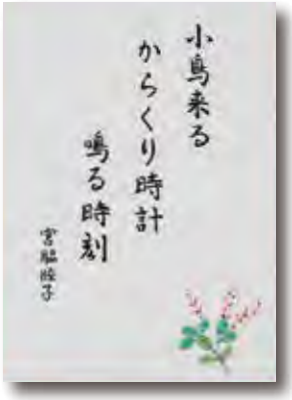
夏の部

入選

柿若葉 濁手伝ふ 柿右衛門　伊万里市　田中　秋子

校訓に 陶の礎 風光る　有田町　田中　耕泉

轆轤蹴る 初体験や ほととぎす　伊万里市　田中　秋子



年間最優秀賞（秋の部　入選）

小鳥来る からくり時計 鳴る時刻

福岡県　宮脇　睦子

秋の部

入選

草の実の 飛ぶ窯裏の 石畳　唐津市　小浜史都女

秋空に 響きわたるや 磁器太鼓　鹿島市　小川　雅義

爽やかや からくり時計の 澄みし音　福岡県　赤坂　邦子

冬の部

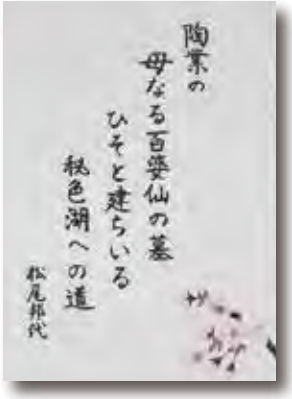
入選

冬麗の 磁石場にある 遊歩道　唐津市　山口　峰華

磁石場へ 落葉の絨毯 続く路　鹿島市　小川　雅義

濁手の 名工の里 柿落葉　鹿島市　小川　雅義

磁石場の 山肌白し 落葉踏む　唐津市　林田　光子



年間最優秀賞（春の部　入選）

陶業の 母なる百婆仙の墓
ひそと建ちいる 秘色湖への道

有田町　松尾　邦代

春の部

入選

遠方の 友と有田五膳 食ぶ碗皿
二千個並ぶ レストラン　有田町　松尾　邦代

陶市に 花を添えくる バグパイプ
異国情緒の 風が響けり　鹿島市　小川　雅義

唐船の 城跡仰ぎ 行き交いき
伊万里港へ 陶荷と車力　有田町　諸石　晧子

泉山 たくさんの石が あるんだよ
この石なんだ 焼物の石だ　有田中学校　副島　里桜

梅雨空を 憂うつに感じ 外見れば
白磁にうつる 七色の虹　有田中学校　空閑　蒼汰

夕暮れの 黄金光る 大公孫樹
有田の町を 見守る光　有田中学校　石永　藍

新年は 家族そろって 行く予定
お参りをしに 陶山神社　有田中学校　福田　莉菜

夏の部

入選

十八夜 ドテマカショとか ジャーモンの
雨乞いまつり 沸く龍泉寺　鹿島市　小川　雅義

箸置きの 素焼を削る 内職の
亡母のまぼろし 縁の陽の中　有田町　松尾　邦代

半世紀 前の陶都の 有田っ子
ハマ投げ遊びし ケンケンパッパ　有田町　松尾　邦代

つめたさが 私を呼んでる おいでよと
泳ぎに行こうか さるがわへ　有田中学校　里　空南

秋の部

入選

絢子さま 婚儀祝いの 引出物
ボンボニエールは 有田磁器です　鹿島市　小川　雅義

唐船城 武士たちの 霊魂を
LEDなる ライト照らしぬ　有田町　諸石　晧子

くちコミで 有田温泉 ヌルヌルと
聞いて来たよと 平戸の客は　有田町　松尾ミツエ

■川柳

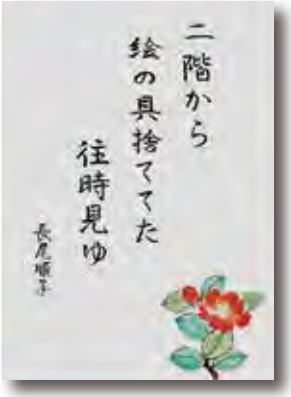
入選

アリタセラ 夜を彩る イルミネーション
有田の名所 一つ増えたり　鹿島市　小川　雅義

ブラタモリ ロケ地を巡り 解き明かす
有田の地質 産業歴史　福岡県　長尾　順子

子の数は それなり保ち 氏神へ
奉納相撲は じいじが行司　有田町　諸石　晧子

食えらび 有田ごぜんに 決まりたり
帰郷の友と 舌鼓うつ　有田町　松尾ミツエ



年間最優秀賞（冬の部　入選）

二階から 絵の具捨ててた 往時見ゆ

福岡県　長尾　順子

平成三十一・令和元年度

選 俳句／田中 南嶽
短歌・川柳／廣澤益次郎

■俳句

春の部

入選

陶市の 朝がゆ旨しうふふふふ　鹿島市　小川　雅義

新校舎 移ったばかりで 卒業式　有田町　雪竹　勝太

マイセンの 雛ちょっぴり 異国風　鹿島市　柳　子

夏の部

入選

天国も 茶碗ありますか？ 陶祖さま　鹿島市　小川　雅義

巨大木 有田に眠りし 守護神（ガーディアン）　有田中学校　能登谷　翼

秋の部

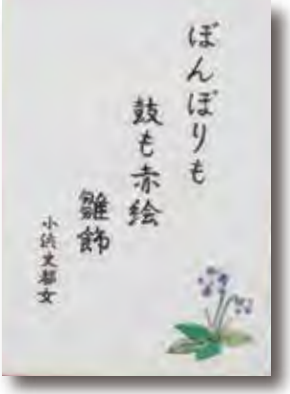
入選

ブラタモリ 陶都の里を 探究す　鹿島市　小川　雅義

年間最優秀賞（春の部　入選）

ぼんぼりも 鼓も赤絵 雛飾

唐津市　小浜史都女



春の部

入選

一点の 宙を見つむる 陶雛　多久市　大石ひろ女

神社より この町に吹く 春疾風　有田工業高校　川内　奏実

夏の部

入選

冷ソーメン 青磁の碗で 涼を増す　鹿島市　小川　雅義

早朝の 朝焼淡し 峡涼し　有田町　雪竹　澄子

大皿の 絵付体験 新樹光　伊万里市　田中　秋子

秋の部

入選

満山を 湖面に集め 照紅葉　大分県　小野　道山

石蕗の 花裏参道の 猿田彦　唐津市　小浜史都女

日にすけし 紅葉美しや 陶工碑　伊万里市　高添すみれ

身に入むや からくり時計 楽奏づ　大分県　小野　道山

神留守の 大きな鈴を 振りにけり　多久市　大石ひろ女

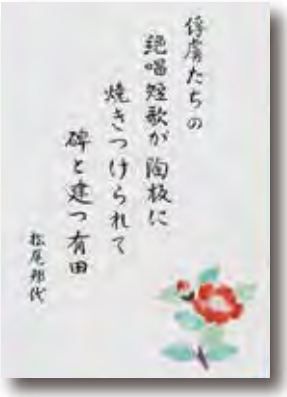
冬の部

入選

狛犬の 爪の先まで 冬日射す　唐津市　小浜史都女

磁石場の 崖千丈に 冬の鵙　多久市　大石ひろ女

唐臼の 汲みて返せし 寒の水　大分県　小野　道山



年間最優秀賞（冬の部　入選）

俘虜たちの 絶唱短歌が 陶板に
焼きつけられて 碑と建つ有田

有田町　松尾　邦代

春の部

入選

卒寿越え 陶土に日がな 箸置きを
造る媼の 情熱まぶし　有田町　諸石　晧子

旅の宿 食事でる度 高台で
窯元確かむ 有田人なる　有田町　松尾ミツエ

夏の部

入選

川底に 眠るベンジャラ 探し出し
時代考証 子等と学べり　鹿島市　小川　雅義

磁器製の カラクリ人形 世にひとつ
大蛇退治を たくみに演じる　有田町　松尾ミツエ

抱き合う クスとエノキの「連理の枝」
社をおおい 夏を真盛る　有田町　松尾　邦代

秋の部

入選

お揃いの 浴衣で踊る 外人さん
　チロリン節で 皿山まつり　鹿島市　小川　雅義

海外の 作家が有田の クリエーター
　意欲も高く 励む作陶　有田町　諸石　晧子

樫の実を 食べし縄文の 末裔か吾も
　四千年前の 遺跡に立ちぬ　有田町　松尾　邦代

冬の部

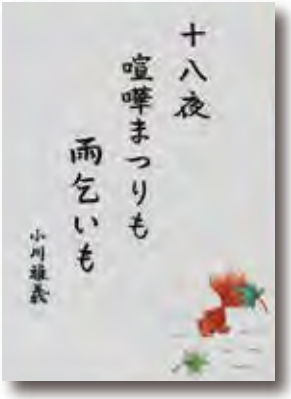
入選

銀杏根は 地下に永らえ 家すら
　移動を迫る 時代は令和　有田町　諸石　晧子

碗琴の 顫動音が 聞こえけり
　冷い風も やはらぐほどに　鹿島市　小川　雅義

教科書で 学びし初代の 柿右衛門
　技継がれ来て 十五代目なり　有田町　松尾ミツエ

■川柳



年間最優秀賞（夏の部　入選）

十八夜 喧嘩まつりも 雨乞いも

鹿島市　小川　雅義

春の部

入選

異人館　”令和“に魅せるアリタモダン　鹿島市　小川　雅義

色白の磁器の雛の器量よし　鹿島市　松尾　康子

陶器市キャリーケースが助け船　鹿島市　柳　子

秋の部

入選

外国の女性もパレード皿山まつり　鹿島市　小川　雅義

冬の部

入選

温泉で　陶磁器談義　今日の瑣事　鹿島市　小川　雅義

選者より

廣澤　益次郎 先生

廃物の　トンバイ積める　塀の路
名物となり　蒼き風ゆく

干し鱈と　昆布の煮染め　伝へ来て
肥前の夏の　祭礼盛る

アオモジの　花の香あはき　陶郷に
四百年目の　春は来にけり

鰆焼き　麦焼酎の　栓抜きて
窯の火止めし　夕を安らふ

陶郷の　六時を告ぐる　カリオンの
野バラは鳴れり　ややくぐもりて

～ひと言～

「有田には題材が無限にある」。題材には風景、歴史、焼物の作品、加えて人の営み詠者の思いがある。言葉、思いをよく整理して作品に込める、そのことも改めて深く思う。

詠者の皆さんそれぞれが町にある多くの題材に向かわれ、選者自身が学ばされたこと、ただ感謝である。

選者より

田中　南嶽 先生

トンバイ塀　ある裏路地も　陶器市

陶を売り　走り茶を売る　コーナーも

走り茶の　篤き持て成し　陶器市

陶市の　有田に清し　若葉雨

窯里の　暮春の雨の　潔く

～ひと言～

有田は、全国に陶都として名前が知られていて、其処に住まわれている方々も誇り高い謙虚な方が多い。その有田の四季を詠むと云う企画は大変素晴らしく、有田の自然や文化を全国に知らせる観光の啓発にも繋がる行為と思って協力しておりました。が、残念ながら打ち切りされてしまった。今までの作品集を事務局より出される事はせめてもの投句者への感謝となる事とお喜び申し上げます。

「有田の四季を詠む」作品集によせて

【平成 24 年度～令和元年度（春・夏・秋・冬）集計結果】

	投稿者数	投稿数			合計
		俳句	短歌	川柳	
平成 24 年度（秋・冬）	24	83	18	12	113
平成 25 年度	63	167	37	6	210
平成 26 年度	75	127	35	29	191
平成 27 年度	71	117	39	39	195
平成 28 年度	78	168	78	83	329
平成 29 年度	60	169	138	57	364
平成 30 年度	153	171	243	79	493
平成 31 年度・令和元年度	48	131	143	52	326
合　計	**572**	**1,133**	**731**	**357**	**2,221**

『編集後記』

8年間にわたって行って参りました「有田の四季を詠む」は、令和元年度をもって終了しました。これまで有田の歌・句を数多く詠んでいただき、ご参加くださいました皆様に厚く御礼申し上げます。また、選者の皆様にも改めてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

有田は、豊かな自然に恵まれた町であり、また、400年の間、有田焼の生産を通して育まれた芸術・文化が根付いている町です。日本には、令和の元号の出典である万葉集の『梅花の宴』のように、美しい花を愛でて歌を詠むという尊い文化がありますが、まさに、有田は、ここを訪れると自然と歌や句を詠みたくなるようなそんな美しい町です。

是非、これからも有田を題材に歌を詠んでいただき、有田を愛でていただければ幸いです。

発　行

一般社団法人 有田観光協会

佐賀県西松浦郡有田町幸平一ー一ー一

TEL ○九五五ー四三ー二一二一

FAX ○九五五ー四三ー二一○○

メール kanko@arita.jp

令和三年三月 発行